

第79回 記者懇談会実施概要

1 日 時 2011年12月16日(金) 15:00~17:00

2 場 所 関西大学会館 グラウンドフロア 常任理事会議室

3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

・富田拓郎 社会学部教授

発表テーマ「トラウマ体験とその『意味』

- 自殺・事故・災害の体験者への調査を実施して - 」

・竹中俊英 化学生命工学部教授

発表テーマ「マグネシウム材料の製造とリサイクル

~ 環境負荷低減を考慮した高性能金属材料の普及をめざして ~ 」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

大阪第一国際交流会館の取得について [資料1](#)

大学院社会安全研究科博士課程後期課程の設置認可

および入学試験の実施について [資料2](#)

社会学部・大西正曹教授のゼミ学生による大型絵馬の制作・設置について [資料3](#)

地域貢献に対する取り組みについて [資料4](#)

社会安全学部生を中心とした東日本大震災被災地支援活動について [資料5](#)

政策創造学部生による地域活性化のための関目商店街との共同企画について [資料6](#)

関大生の活躍について [資料7](#)

4 大学側出席者

楠見晴重学長、黒田勇副学長、本西泰三学長補佐

富田拓郎社会学部教授、竹中俊英化学生命工学部教授、

横山博行広報室長、中川雄弘広報課長、竹中敏治学長課長 他

5 参考資料

(1) 関西大学通信 第408号、第409号、第410号

(2) 関西大学ニューズレター「Reed」No. 27

(3) 関西大学理工学会誌「理工学と技術 VOL. 18」

(4) 第16回関西大学先端科学技術シンポジウム チラシ

(5) 行事予定表(12月~1月)

以 上

トラウマ体験とその「意味」

- 自殺・事故・災害の体験者への調査を実施して -

社会学部教授 富田拓郎

【概要】

東日本大震災によるさまざまな問題は枚挙にいとまがないが、その一つに被災者の心身へのさまざまなトラブルが挙げられる。内外の研究で、災害後には遺族の死亡率や身体疾患への罹患率が高まる、遺族の自殺率が高まるなどが指摘されている。中でも、長引く悲嘆(長期化悲嘆)の問題は遺族の日常生活に大きく影響することが知られている。

しかしながら、こうしたトラウマ体験を克服して、その後を生き抜く被災者も少なくない。こうした違いはどうして生じるのだろうか?近年になり、辛い体験をした後に、日常生活での困難さを緩和し、前向きに生きていく要因として“レジリエンス”(辛い体験の後に「得られる力」や成長力となる傾向)、死別への意味づけ、死者との関係性といったさまざまな要因が研究されている。

我々の研究グループは2010年の夏から秋にかけて、自殺・事故・災害等のトラウマ体験者を対象に、全国規模のアンケート調査(対象者数およそ200人)を行った。第一に、災害、事故被害者遺族の悲嘆症状についてアンケート調査を行い、悲嘆、抑うつ、トラウマの各症状の実態を検討した。第二に、トラウマ症状、悲嘆症状、抑うつ症状とレジリエンス、死別後の意味づけ、死者との関係性との関連について検討した。

当日は、トラウマと悲嘆に関するこれまでの内外の実証的研究成果を踏まえつつ、今回の調査結果の一部について紹介したい。こうした結果を踏まえながら、調査実施後に起きた東日本大震災の被災者支援について、私見を述べてみたい。

【プロフィール】

1968年東京生まれ。関西大学社会学部教授。博士(人間科学)。臨床心理士。早稲田大学人間科学部卒。早大大学院人間科学研究科博士後期課程満期退学。専門はパーソナリティ心理学、トラウマと悲嘆・暴力の臨床社会心理学、死別体験後の悲嘆と心身の適応など。訳書に「喪失と悲嘆の心理療法 - 構成主義からみた意味の探究(監訳)」、(金剛出版)など。国内外での学術論文多数。

マグネシウム材料の製造とリサイクル

～環境負荷低減を考慮した高性能金属材料の普及をめざして～

化学生命工学部 竹中俊英

【概要】

金属材料は強さとしなやかさを併せ持ち、車や電機機器などの現在生活をささえる工業製品に欠かすことができない材料である。最近では可搬性や移動エネルギー節約のため、金属材料にも軽量であることが求められるようになってきている。このため、高張力鋼板やアルミニウム合金のような高比強度材料の利用が進んでいるが、さらに高性能な次世代材料としてマグネシウムやチタンが期待されている。本研究室では、主にマグネシウムやチタンの製造プロセスやリサイクルプロセスの研究を行っている。

マグネシウム材料は、高比強度等の優れた特性を有する上、資源的にも余裕があり、利用促進が期待される金属材料である。現状では、耐食性や加工性に劣るなどの問題のため、その利用は大きくは進んでいないが、次第にこれらの問題も解決されつつある。マグネシウム材料の利用が進んだ際、大きな問題となると予想されるのが、素材生産やリサイクルの問題である。

マグネシウムは、リサイクル性に優れた金属とされている。天然資源から生産する際に必要なエネルギーの3%程度のエネルギーでリサイクル可能、とする試算もあるほどである。一方で、リサイクルしたマグネシウムには他の金属が混入しやすく、これらを除去するのはかなり難しい。混入した金属不純物の一部は、リサイクル材の耐食性を著しく悪化させることが知られており、それらを効率よく除去する手法は未だに確立されていないのが現状である。逆に、効率的に不純物を除去できるリサイクルプロセスを確立することこそが、マグネシウム材料の利用促進の必須条件ともいえる。このような観点から、本研究室では実用化を念頭においた効率的な不純物除去方法の研究を進めている。

現在行われているマグネシウム金属素材の主な製造プロセスにおいて、多量のCO₂ガスが発生することが問題となっており、より環境負荷の小さい製造プロセスへの転換が望まれている。本研究室では、熔融塩電解法と呼ばれる手法を用い、マグネシウム製造プロセスの刷新をめざした研究もあわせて行っている。

【プロフィール】

1958年神戸市生まれ。関西大学 化学生命工学部教授、工学博士。専門は、金属生産工学、高温融体化学。京都大学工学部卒業、同大学院工学研究科博士課程退学。米国アルゴンヌ国立研究所・ポスドク、東北大学選鉱製錬研究所(現・多元物質科学研究所)・助手、豊橋技術科学大学・講師・准教授を経て、2010年4月から現職。日本鉄鋼協会・学術記念賞、電気化学会熔融塩委員会・熔融塩賞、日本チタン協会・技術賞等を受賞。趣味は街歩きなど。